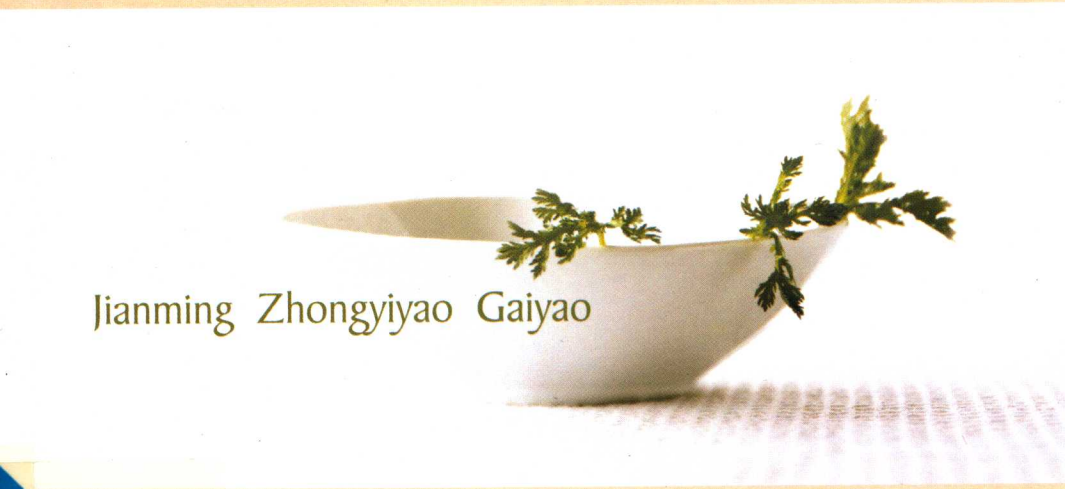
やさしい中医薬概要

简明中医药概要



Jianming Zhongyiyao Gaiyao

主　编 倪虹　　副主编 王建

四川大学出版社

四川外国语言文学研究中心、上海外语教育出版社资助
课题编号： SCWYH13-10

R2
497

やさしい中医薬概要

Jianming Zhongyiyao Gaiyao

主　编　倪虹
副主编　王建
编　者　刘渊　陆烨　张萍
　　陈静　肖忠琼

中医学院　0666968

四川大学出版社

特约编辑:蒋　萌
责任编辑:李勇军
责任校对:王　平
封面设计:米迦设计工作室
责任印制:王　炜

图书在版编目(CIP)数据

简明中医药概要：汉日对照 / 倪虹主编. —成都：四川大学出版社，2014.1
ISBN 978-7-5614-7508-9

Ⅰ.①简…　Ⅱ.①倪…　Ⅲ.①日语-汉语-对照读物②中国医药学　Ⅳ.①H369.4：R

中国版本图书馆 CIP 数据核字（2014）第 015442 号

书名　**やさしい中医薬概要**
（中文书名:简明中医药概要）

主　　编　倪　虹
出　　版　四川大学出版社
地　　址　成都市一环路南一段 24 号 (610065)
发　　行　四川大学出版社
书　　号　ISBN 978-7-5614-7508-9
印　　刷　郫县犀浦印刷厂
成品尺寸　148 mm×210 mm
印　　张　5.25
字　　数　204 千字
版　　次　2014 年 2 月第 1 版
印　　次　2014 年 2 月第 1 次印刷
定　　价　30.00 元

版权所有◆侵权必究

◆读者邮购本书,请与本社发行科联系。
电话:(028)85408408/(028)85401670/
(028)85408023　邮政编码:610065
◆本社图书如有印装质量问题,请寄回出版社调换。
◆网址:http://www.scup.cn

前言

随着我国高等教学的发展，近10多年来，国内高校的日语专业如雨后春笋般相继开设，在中医药院校中，成都中医药大学也于2007年继长春中医药大学之后开设了日语专业。由于中医药类高校的日语专业较之综合性大学或专门外国语学校的日语专业，更具有“中医药”教育的特殊性，基于此，为培养既精通日语又具有中医药基础理论和基本知识的复合型人才，开设了“中医日语”课。但苦于国内尚未有适合的教科书出版，给教学带来了不便。因此，编写一本涵盖中医药基础理论和基本知识，深入浅出，兼顾有实用性和趣味性，能受年轻学生喜爱的中医药日语特色教材，即是编者的愿望。在成都中医药大学的支持下，由“中医日语”任课教师及其他日语教研室教师组成编写团队，大家结合自身多年的教学、工作经历，齐心协力，编写了这本教材。

本教材共分三篇，上篇为中医学基础知识概要，包括阴阳五行，气血津液，五脏六腑，病因学，未病，中医诊法与辨证等章节；中篇为中药学基础知识概要，包括中药的性能，七情配伍，用药禁忌和食药两用素材；下篇为四季保健养身概要，包括四季变化与脏腑功能，在日本的健康食品和汉方美容等内容。在编写过程中，为了保证用语的准确性，参考了日本汉方界相关资料，并于每章前面列出了本章节的“学习要点”，章节后面附上了难词注音，名词解释注释和思考题，便于老师检查和学生自查本章节的学习情况。

本教材撰写分工如下：

倪虹（成都中医药大学外语学院日语教研室副教授），负责教材整体编写工作，并编写第二章和第四章。

王建（成都中医药大学药学院教授），负责编写第三章和第八章第一、二、三节，并负责教材的全面审查。

刘渊（成都中医药大学基础医学院教授），负责编写第七章。

张萍（成都中医药大学外语学院日语教研室讲师），负责编写第八章第四节和第九章第二节。

陈静（成都中医药大学外语学院日语教研室助教），负责编写第六章和第九章第一节。

陆烨（成都中医药大学兼职教师，临床医学院在读留学生），负责编写第一章和第五章。

肖忠琼（成都中医药大学外语学院副教授），协助编写第三章。

本教材编写完成后，由陆烨对全书日语表达进行了全面审核、确认，对其付出的辛勤劳动，深表谢意。

本教材不仅适合于中医药高校的日语专业本专科学生使用，也适合有一定日语水平的中医药专业学生乃至医药类攻读硕、博士研究生中将日语作为第一外语或第二外语学习的学生使用。

本教材的编写出版得到了成都中医药大学各级领导的支持和关心，在编写过程中还得到了上海中医药大学郁伟忠老师的大力支持，在此深表感谢！

由于编写时间仓促，水平有限，本教材还存在许多不足和疏漏，敬请同行专家批评指正！

编 者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

漢方のお話……1
第一章　緒　論……8
第一節　中医学の基本的内容……8
一、中医学の属性……8
二、中医学理論体系の形成……10
第二節　中医学の特徴……12
一、整体観念……12
二、弁証論治……12
第三節　中医の医療保健作用……14
一、中薬……14
二、鍼灸……15
三、按摩……15
四、気功……16
五、薬膳……16
六、養生……17
まとめ問題……18
第二章　陰陽五行……20
第一節　陰陽学説……20
一、陰陽の基本概念……20
二、陰陽学説の基本的内容について……21
三、中医学における陰陽学説の応用……22

第二節　五行学説……25
一、五行の概念……25
二、五行の分類……25
三、五行の関係……26
四、五行学説が中医学への応用……32
まとめ問題……35
第三章　気血津液……36
第一節　気……36
一、気の概念……36
二、気の生理機能……37
三、気の生成及び分類……38
第二節　血……41
一、血の概念……41
二、血の生成……42
三、血の生理機能……42
第三節　津液……43
一、津液の概念……43
二、津液の生成・輸布および排泄……44
三、津液の作用……45
第四節　気・血・津液の相互関係……46
一、気と血の関係……46
二、気と津液の関係……48
三、津液と血の関係……49
まとめ問題……50

第四章　五臓六腑……52
第一節　五臓……53
一、心の生理機能……53
二、肺の生理機能……53
三、脾の機能……54
四、肝の生理機能……55
五、腎の生理機能……56
第二節　六腑……57
一、胆……57
二、小腸……57
三、胃……58
四、大腸……58
五、膀胱……58
六、三焦……59
第三節　奇桓の腑……61
一、脳……61
二、髄……61
三、女子胞（子宮）……62
第四節　臓腑間の関係……62
一、臓と臓の関係……63
二、臓と腑の関係……67
まとめ問題……69
第五章　病因学……71
第一節　外感病因……71

一、六淫……71
二、疫 れい……74
第二節　内傷病因……75
一、七情……75
二、飲食労逸……79
第三節　継発性病因……81
一、瘀　血……81
二、痰　飲……82
まとめ問題……84
第六章　未病……86
第一節　「未病」とは……86
一、未病の概念……86
二、未病の種類と症状……88
第二節　未病を治す……90
一、未病先防（みびょうせんぼう）……90
二、既病防変（きびょうぼうへん）……93
まとめ問題……94
第七章　中医の診断法と弁証……97
第一節　診断法……97
一、望診……98
二、聞診……101
三、問診……102
四、切診……104
第二節　弁証……106

一、八網弁証……107
二、気血津液弁証……108
まとめ問題……111
第八章　中薬の基本理論……113
第一節 中薬の性能……113
一、四気（しき）……113
二、五味（ごみ）……115
三、帰経（きけい）……117
四、昇降浮沈……118
五、毒性（どくせい）……120
第二節　七情配合……122
一、七情の概念……122
二、配合の意味……123
第三節　用薬禁忌……124
一、併用禁忌薬……124
二、妊婦の禁忌薬……125
三、病気の 禁忌薬……125
四、アレルギー 禁忌薬……125
五、食べ物の禁忌……125
まとめ問題……126
第四節　食薬両用素材……128
一、中国における食薬素材……128
二、日本における食薬両用素材……135
まとめ問題……135

第九章　四季養生と美容……138
第一節　四季変化と臓腑機能……138
一、中医学における四季……139
二、四季と臓腑機能……140
まとめ問題……148
第二節　日本における健康食品……151
一、わかさのアガリクスと鹿角霊芝……151
二、ネバネバ海藻スーパーフコイダン……151
三、納豆キナーゼ……152
四、やわたローヤルゼリー……152
五、食物繊維……152
六、さらさら美流……153
七、高麗人参ソフトカプセル……153
八、スーパーウコンD……153
第三節　漢方美容（外用）……154
一、粉剤……154
二、溶液……155
三、軟膏……155
四、パック……156
まとめ問題……157
参考文献……159

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

漢方のお話

「漢方」とは

漢方のもとである中医学は、今から約2000年以上も前に成り立った。5～6世紀頃に中国から直接、あるいは朝鮮半島経由で日本に伝わったと言われる。

当時の日本で、オランダから伝わった西洋医学を「蘭学（らんがく）」と呼ぶのに対し、これと区別するために「漢方（かんぽう）」と呼ぶようになった。漢方が伝わってきた後、日本で独自の診断や処方が加えられて発展してきた。とくに平安時代から江戸時代中期に大きく発展した。

このように、漢方は日本の医学であるのが分かるでしょう。

また、「東洋医学」という言葉があるが、これをおおまかに説明すると、アジア全体の医学のことを指す。それが主に中医学やインド医学、チベット医学、韓方などの医学である。日本で知られている東洋医学は、たいてい漢方や中医学のことを指す。

漢方診療所の様子

漢方の歴史

中国では漢の時代(紀元前3世紀～後2世紀)に民間医療の体系化が始まった。これが文字通り漢方の起源である。

「日本漢方」は平安時代に中国から遣唐使によって伝えられたのが起源とされている。

そして鎌倉時代、室町時代、江戸時代と時が経過する間に、処方の改良・日本産生薬の利用・使用生薬の少量化などで日本独自の発展を遂げてきた。

しかし、長い鎖国は、日本の医学にも大きな影響を与えた。外国との交易は長崎において続いたが、中医学が新たに入って来ることは少なくなった。そして、それまでの伝統医学は日本の中で独自に発展し、江戸時代中期には「漢方」の名称で、ほぼ完全に中医学から分離した。このような発展を遂げたものが日本漢方になる。

病院の外観

病院内部のお薬管理所

西洋医学について

西洋医学というのは現代医学のこと。主としてヨーロッパにおいて発展してきた医学のことで、古代ギリシャによる発祥であったとされる。

西洋医学の基本は、科学的な視点と物理的な力を重視する。

西洋医学は、健康とは肉体に異常が見られない状態、病気とは肉体に異常が見られる状態と考える。医学検査に異常がなければ健康、異常があれば病気と診断される。ここに肉体だけを医学の対象とする唯物医学の健康観・病気観が端的に示されている。

こうした現代医学の健康観に従うならば、どのような人間も、健康か病気かのいずれかに属するのであろう。「健康人」か「病人」かの「二分法的健康観」が現代西洋医学の特徴である。

東洋医学と西洋医学の区別

東洋医学	西洋医学
哲学的	科学的
総合的	分析的
全体的	局部的
内科的	外科的
対証的	対症的
経験的	理論的
個人医学	社会医学
体質予防	細菌消滅
人体経験	動物実験
液体病理学	細胞病理学
自覚症重視	他覚症重視
天然生薬	化学薬品

上の表は東洋医学と西洋医学の特徴を比較したものである。

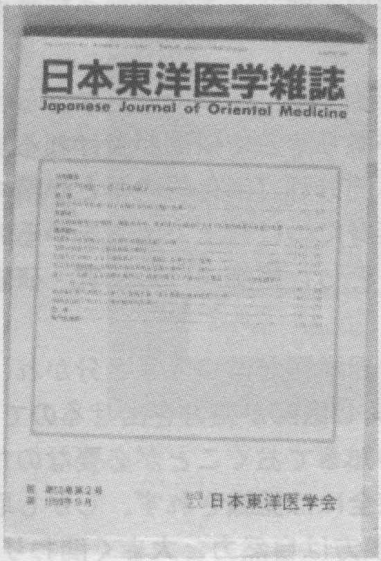
日本漢方と中国医学

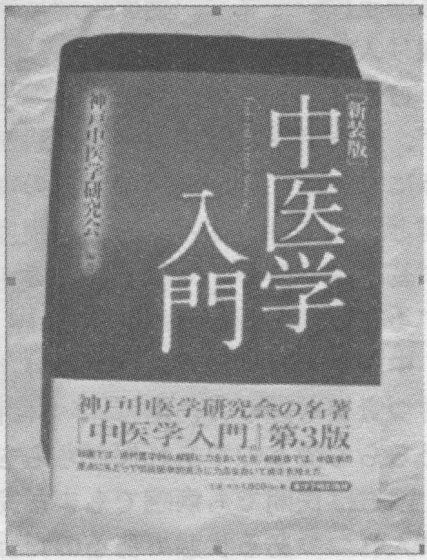
現在の日本では主に「日本漢方」と「中医学」との二つの漢方流派がある。「漢方＝中医学」と勘違いすることが多く見られるようだが、両者はそれぞれ別なのである。

中医学には「中医基礎理論」や「病因病機学」など、病気の原因と発生の理論があるのが特徴で、「五臓六腑」や「気・血・水」などの中国の伝統的な医学理論に基づいている。

一方、日本漢方の場合は「五臓六腑」などといった理論をあまり重視しない代わりに処方構成と生薬の量が日本人の体質に合っていることを考え、つまり「複雑な理論より経験を異化しない処方を上手に使う」ことを重視してきていた。

中医学は、すばらしい医学理論体系を持った伝統医学であって、近年では、日本でも中医学を勉強する医師、中医処方を出す病院や薬局が増えてきた。





（漢方に関係する本のイメージ図）

漢方講義の様子

漢方の現状

日本では一般的に、病気になれば西洋医学に基づく診察を受けるのが普通である。西洋医学が主流ではあるが、近年、西洋医学手段で治れない病気が増え無理を感じ、そこで他の医学を取り入れるのであった。

日本で漢方を専門に教える学校や学部は現状では見かけられず、東洋医学の診療科・研究科がありそこで研修が受けれるようになっている。医師は自分の専門分野（消化器内科とか精神科とか心臓外科など）をある程度身につけた上で漢方をやるのが基本的である。分野で専門医をとった医師向けの研究・研修する施設は全国各地にある。

中国のように漢方医（中医師）と西洋医がはっきりと分かれ、持つ資格も違うのだが、日本では同じ医師が処方を出せるので、どちらも使うのであればどちらも知っておくことが必要なのだ。

漢方は民間でも病院でもまだ完全には認識されず、しかし取り入れつつある状態であるのだ。漢方は自然力と大きく関わり、人間はこの自然さに対する安心感を持ち漢方薬や漢方療法を用いる。特に日本民間でいうと女性に人気の傾向が見られる。これは細かく変化する女性の体は漢方薬の効果を実感しやすいからだ。病院でも漢方の処方が増えてきているのである。

薬　局

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com